近畿方言語法調査項目

——概観と調査簿作成のために——

鎌　田　良　二

1

近畿方言の調査項目については，既に西宮一民氏の「近畿方言調査簿」（近畿方言学会刊）がある。

また，近畿方言全般についての研究書として楳垣実氏編の「近畿方言の総合的研究」（三省堂）があり，ほかにも語法について詳しく記されたものは数多い。

そこで，これらの研究書から得られる語法に，私の最近の臨地調査による結果を加え，近畿畿方言語法の概観と，今後のための調査項目を考えてみたい。

既に，多くの研究書があるにもかかわらず，あえてここに調査項目について書くには二つの理由がある。

その一つは例えば，「方言学講座」（東京堂）によって全国各県の語法を通して見ようとする時，各県ごとの記述は実に詳細であるが，それらの間の記述方法が一様ではなく，横の連絡に欠けるところがある。

或る一つのAという語形がP県の特色としてかなり詳しく述べられていても，隣のQ県ではそれについて何もふれないで別のB語形について記してある。これはまた逆にP県ではB語形がどうなっているのかがわからない。

この場合，A語形がA′語形に，そしてさらにA″語形にと変化して，それがB″—B′—Bとなっていることもあろうし，

あるいはP県のA語形と，Q県の別の或る語形とが一見結果的には非常に

近いように見えても実は全く関係のないものかもしれない。

このためには，A語形の横の広がりを知らなければならないし，近畿方言圏に接する外の地域の語法をもとり入れて調べる必要がある。

理由の第二については，「言語史研究入門」（平凡社）に次の例がある。

糸魚川の調査で，「買った」の方言形が，中学生と老人とでは次のように違っている。

	コータ	カータ	カッタ	計
中学生	1％	71％	28％	100％
老人	18％	76％	6％	100％

コータはこの土地では古い形で，若い人々にはカッタになろうとしているのである。

このように年令層による違いがあることから，例えば，20才代，40才代，60才代では語法の上でどのように違っているかを調べる為にも，従来の研究書に加え，補ないつつその動きをも研究すべきである。

さらに，上の表から，同じ中学2年生でありながら，カータを使う者とカッタを使う者とがあるように，同年代による動きにも注目しなければならない。

神戸市について調査した結果を示せば次の通りである。神戸市の旧市内の中心部は兵庫区であるが，兵庫区の地理的中心部にある兵庫中学校の2年生，男子48名，女子38名，計86名（外来者を除く）について，「『いくら待ってもなかなか来ない』の『来ない』にあたる部分を次のうち，どれを使いますか。もし，この中になければ自分の言い方を記して下さい」として調査したところ次の結果を得た。

次の表の語のならべ方は意識的に同じような形が続かないようにした。

「ときたま使う」以下は記入しなかった者があるので合計があわないのである。

この結果，「ケーヘン」が神戸の中学生の場合最も普通の形ということに

神戸方言としてはこれだと思う			語形	普通によく使う		ときたまつかう		使ったことがある	
男女(%)	男(%)	女(%)		男(人)	女(人)	男(人)	女(人)	男(人)	女(人)
2	4	0	キーヘン	3	0	10	6	2	8
1	0	3	キヤヘン	0	0	1	0	10	12
66	80	51	ケーヘン	31	21	8	12	4	2
28	13	43	コーヘン	9	13	8	10	4	8
3	3	3	コヤヘン	5	2	8	4	4	2
0	0	0	キーヒン	0	0	2	0	0	0
0	0	0	コエヘン	0	2	0	0	0	0

なるが，「コーヘン」もかなりあることがわかる。

このようなことから，京都，大阪，神戸という都市を中心として，これら三都市の間にある急激に人口増加しているところのゆれている，動いている方言形をも知りたい。

従来のすぐれた研究書の多い近畿方言も，「いせの海清きなぎさの玉は，拾ふともつくることなく，いづみのそましげき宮木は，引くともたゆべからず」で，ここにあえて語法調査を試みるのである。

2

語法の調査項目を選ぶにあたって，都竹通年雄氏の言われるように，[1]「文法論上の問題が音韻論，語彙論上の問題とまぎれるような事実について」は特に注意しなければならない。

また，同じく語法上の事実であっても，調査する上に重要なものと，そうでないものとがある。

これについては金田一春彦氏が「方言学講座第一巻」で述べられているこ

1) 『方言文法論の方法』「国語学１２」（国語学会編）

とをまとめると文法上重要なものは次のようになる。

① 日常頻繁に用いられる語法

指定助動詞　ダ　ジャ　ヤなど。

これに対して，「風コソ吹ケ，波はない」のような係結はこの意味であまり重要ではない。

② 由来の違うものの対立

命令をあらわす，見ロ，起キロに対して，見ヨ，起キヨなど。

これに対して，見テ（連用形＋て）が，見チとなるなどは重視しない。

③ 対応する形の有無

千葉・神奈川・静岡・山梨・長野で，見ルダ，書クダがあるが，東京では，見ルノダ，書クノダがある。しかし，東京の見ルダロー対見ルノダローにあたるものが千葉・神奈川……にはないのではないか。

④ 活用形の一つを特立しない場合

大阪方言等における命令が「見ー」「起キー」となって活用形としての命令形を特立せず連用形命令法を用いること。

同じように，志向形をもたぬ方言が東日本に多い。

見ヨー，書コーなどと一動詞の活用形としてあらわれるものが，見ベー，書クベーとなって助動詞「ベー」であらわす。

さらに，この「ベー」も，

㋑ 推量・意志とも「書クベー」となる（大部分）

㋺ 推量だけ「書クベー」となる（北奥）

㋩ 意志だけに「書クベー」を使う（西関東・山梨・静岡）

また，見タロー，書イタローのような完了態の表現を，見タヤロー，書イタベーのように二語であらわす方言と，書イツラ（東海・東山），書イツロー（九州・高知）のように一語であらわす方言とがある。

⑤ 文体論に関係をもつもの

京都・大阪ではダ体とデス・マス体とをもつが，東京ではダ体だけである。

⑥ 東西に明らかな対立をなすもの

東日本の「見ナイ，書カナイ」に対して，西日本の「見ン・書カン」や「見ーヘン・書カヘン」(京都)，「書カヒン」(奈良)，「書ケヘン」(大阪)，「書ケセン」(名古屋) など。

⑦ 助詞の融合

鹿児島県で，柿は―カキャ　柿を―カキョ　柿に―カキとなるなど。

近畿の代表的な文法現象として楳垣実氏は次のように述べておられる。[2)]

近畿中心部ではオトイタ（落した)，ホイタ（干した）などのサ行イ音便は，サイタ（差した）を除いては失われたし，オル（居）もイルに変って，オルは多少見下げた気持にしか使われなくなりつつある。

しかし，シモータ（仕舞った）ウトーテ（歌って）ヨー（良く）ナゴー（長く）などの動詞，形容詞のウ音便，ン（ない）という打消の助動詞，ヤ（だ）という指定助動詞，ツケー（付けよ）ミー(見よ)の命令形，「は，が，を，と」などの助詞抜きの表現はすべて近畿の代表的な文法現象である。

近畿でも山間とか不便な土地へ行くと指定助動詞はダのところが多く，とくにダローをいう形は但馬・丹後・淡路・南近畿にもある。

ここで，近畿全般の特徴的な語法を知って，それがどこに，どのようにあるか，例えば，和歌山県のこの語形が果して和歌山県だけのものであるのかどうか，近畿にある形を，また，それがどこまで続いているかを調べるのであるが，その為には一応，各地の代表的な語法，先に記した意味での重要な語法をあげなければならない。

先ず，楳垣実氏の区画を記し，[3)] それに奥村三雄氏の語法[4)] をあわせるとおおよそ次のようになる。

2) 『近畿のことば』「日本文化風土記 五」（河出書房刊）
3) 「全国方言資料 四」（日本放送協会編）に金田一春彦氏による紹介がある。
4) 『近畿方言の区画』「日本の方言区画」（日本方言研究会編）ほかにも本稿は奥村三雄氏のご論文によるところが大きい。

A　内近畿

1　東・内近畿――山城・東丹波（以上京都府）近江大部（滋賀県）伊賀（三重県）

2　西・内近畿――摂津東部・河内・和泉（以上大阪府・一部兵庫県）北大和（奈良県）

B　中近畿

3　東・北・中近畿――丹波・丹後東南（以上京都府）

4　西・中近畿――播磨・淡路・西丹波（以上兵庫県）

5　南・中近畿――伊勢南部・志摩（以上三重県），紀伊北部（和歌山県）

C　外近畿

6　南・外近畿――西大和（奈良県）紀伊大部（和歌山県・三重県）

7　北・外近畿――丹後大部（京都府）但馬（兵庫県）

東・内近畿の京都方言の勢力範囲を広くとれば京都府・滋賀県・福井県。

西・内近畿の大阪方言の勢力範囲を広くとれば，大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県で，三重県は，東または南に属するが，大阪の影響が大きいといわれる。

以下，各地の代表的語法をあげれば次のようになる。

A－1　近江の北部＜条件法　行クトサイガ，間投詞ナーシ，指小辞　犬メ＞　伊賀＜敬語法　書カッシャル・サル・書カハル，存在法　オル　イル　動作法　書イトル，書イテル，丁寧法　ダス　ゴワス，特殊助詞　行カンドクニ（行かないで），コレハッチャ（これしか）＞

A－2　摂津＜ミテッチャ（見ていなさる）カキヤル（お書きなさる）＞　河内　＜カッコル（書きよる）＞　北大和＜書カル・書イテラル（親愛）＞

B－3　丹波・丹後＜ゴザス（ございます）書イテヤ（書いていなさる）＝西中近畿と共通，ンダ（しなかった）＝内近畿はナンダ＞

B—4　一般＜オル（いる）動作法　ショル，結果法　シトルの区別あり，敬語法　書イテヤ＝書かハルはない，否定　書カヘン（神戸から播磨一帯＝京都はない）＝書ケヘン—大阪的，サ行イ音便あり＞　西播＜否定　起キラン　使役　起キラス＞

B—5　和歌山地区＜否定　見ラン　一段活用の五段化，動作法　降リヨル・降リヤル，結果法　降ットル・降ッタルの区別あり＝兵庫県下のように明瞭ではない，敬語法　丁寧法の助動詞少く，言葉荒い，断定法　ダッタ，ダロー，終止形はジャ，ヤ，主格助詞の変形　アミャ・アメァ（雨は・雨が）特殊終助詞　行クガレ・行コラ，コガイナ系の指示詞＞　伊勢南部＜バ・マ行長音便　飲—ダ，過去否定法　行カザッタ＞　牟婁地区（西牟婁を除き，度会郡西南部を含む）＜可能法　書キエル・書ケレル・見エレル，敬語法　書カンス＞

C—6　南大和＜ガ行撥音便　研(イ)ンダ，バ・マ行長音便　飲—ダ，過去推量法　書イツロー，音便　カータ（書いた）　アカーなる（赤くなる)＞　紀伊大部＜二段活用著しい，生物存在　アル，動作法　降リヤル，結果法　降ッタル・降ッチャル，サ行イ音便　出イセ・落イセ（出して・落して)＞

C—7　一般＜断定法　ダ・ダッタ・ダロー＝ダッタ・ダローはあるが，ダは稀の地がある，意志法　起キョー・起キュー，敬語法　書キナル，否定法　起キラヘン，起キレヘン，サ行イ音便あり，行カー（行こう）＝坊主バアズのような音化傾向，ワ行促音便　払ッタ，使役法　書カセル，敬語法書キンサル，場所格助詞　カラ（山で)，順接助詞（理由）　サカイから来たサケ・スケ＞

3

内・中・外近畿各地点の特徴により近畿内部のおおよその形がわかったところで近畿語法をとりまく地域との関係をみるとともに調査項目について考

えたい。

以下各品詞別に記すが，互いに関連する形は対比しつつ調べる方が便利だし，融合化の傾向のある助詞・助動詞はその語とともに記す方が自然であるのでその都度記した。

なお，語法調査はすべて実際の文の形になったものをその場面とともにとらえなければならない。特に敬語法などは，誰から誰に対して言ったかなどが大切である。

しかし，語法の比較という立場をとる場合，やはり，いくつかの照応関係にまとめるべきで，そうしないときには，作業が非常に困難なものとなる。調査法に関する問題である。

動詞

(1)動作法・結果法

将然「あっ，危い，落チョル」「金魚がアプアプして，死ニョーデ」などと，将然は瞬間動詞にヨルがついた形。進行は書キョルと書イトルとがあるが，「学校を出て家に帰りつつある時，帰リョル」「家に到着してしまっている時，帰ットル」というか，雪が降りつつある時，降リョルと降ットルとを使うが，空が晴れていて積っている時は，「今日は雪が降ットルから長靴をはいていく」などというか。また，「こんな所に（落書）書キョル・書イトル」（いつ書いたかわからない）などの使い方があるか，さらに，尊敬と結びついて「先生が書キョッテヤ」「書イトッテヤ」というか。

ヨルがョーとなったり，トルがトーとか，チョルになったりするか。

降リョルが降ッリョールのようになるか。

また，島根県出雲市のように降リョッタと過去形だけがあり，降リョルの現在形はないというようなことがあるか。

これらは要するに「――おる」と「――ておる」との違いになるから，イル（居）という地よりもオルという地にあるだろうが，アルとの関係かと思われる，書キヤル（近江の一部）で尊敬を表わす地域もある。

中国地方の岡山県には

	進行動詞	存続動詞	未来動詞
(書)	カキョール	カェートル	カェートク
(読)	ヨミョール	ヨンドル	ヨンドク
(起)	オキュール	オキトル	オキトク
(受)	ウキョール	ウケトル	ウケトク

などがある。

さらに，四国の高知県では「――てある」がチャール（未然・命令なし）「言うてある」が「言ウチャール」，「言うてない」が「言ウチャーナイ」となる。

「――ている」は

ユー（ヨル）――しつつある

チュー――（チョル）――完了

終止形・連体形に用い，他の活用形には「ヨル」「チョル」の四段に活用したものを用いる。

行キヨル⟶行キユー

来チョル⟶キチュー

(2)動詞活用形

㋑意志形

「行く」　イカー系（但馬），イコー系（近畿一般）のどちらか。

㋺否定形

否定形と不可能表現とを対比しつつ調べるのが便利であるが，その間にアクセントの違いによる場合もあるから注意。

	神戸	但馬・南淡路
否　定	行カヘン	行ケヘン
不可能	行ケーヘン	行ケレヘン
	行カレヘン	

金田一春彦氏は「日本民俗学大系　10」（平凡社）で，

地方の言葉には，また，文法的なナマリのために，論理的には矛盾してい

るようないい方も生まれている，たとえば，飛弾から富山にかけて「見るな」という制止法を「見ンナ」といって打消しの回数が一つよけいである。

と述べておられるが，これは，「見ルナ」の「る」が「ン」になったのであろう。地方で，この例の「ル」の脱落は多い。「取るな」「するな」の制止法は「トンナ」「スンナ」である。「見ない」の意の制止法は「見ン」と言い得ても，「する」の制止法は「スン」とはならない，だから，この「ン」は「ない」の意ではないと思う。

このように，どの部分が何をあらわしているかに注意しなければならない。

㈥連用形

「買うて」の形が，カーテ（但馬）となる地があるが，これは他の語のａｕ連母音との関係はどうか，などと対比しつつ調べること。

連用形敬語法

京都でオ書キタという軽い敬語法が年配の人に用いられているが，愛媛県のオ書キルとともにその分布と使用年令層を調べる。

連用形命令法

京都で，書キイ，オ書キ，書キヨシ，書キナがあるが，大阪で，ハヨ書キハヨ掃除シイの形で命令になる。

㈡音便形

西部の方言として「買った」が「買うた」となることをあげるが，先の糸魚川の例のように若い人々の間に動きがあるかどうかが問題だろう。

しかし，但馬にあるカータの形は，カーテと同称，ａｕ連母音の関係か，この地方では「行っただろう」も，行ッタラーとなる，など，他の語と合せ考える必要がある。

形容詞の場合も，赤くなる⟶アカーなる（但馬）で，播磨は「アコーなる」，南伊勢，紀州では「アコなる」である。

「方言学講座第三巻」で楳垣実氏は，

形容詞の連用形も西部ではアコーなる，アコなるだが，出雲・因幡・但馬

では「アカーなる・アカなる」で東部的。西部の特徴とされる「買うた」「借った」も出雲では「カータ」「カリタ」で東部的。

と述べておられるが，これも，a u 連母音との関係とみるべきか。

ウ音便

志摩などに，飲ーダ，飛ーダがある。これは九州・山口・南四国に多い形である。

略音便

京阪神とも「行った」が，イタのようになる。食って——クテ，持って——モテとなるが，「縫って，買って，酔って」などはならない。

サ行イ音便

近畿全域にあるようだが中心部になるほどうすく，京都にはない。

京都でも「傘サイテ行く」はあるので，先ず，「サイテ」を調べて，他のイ音便になる語，ならない語を調べる。また，サエテ，セエテなどとなる地方もある。愛媛県ではサヒタとなるところもある。

近江の湖東では，話イサとなる。

㋭仮定形

「降れば」は大部分で，「降ッタラ」であるが，「降リャー」を専用する地域は外近畿に多いようだ。また，年令層による違いがあるか。高知市では，老人は（行）イキャー，（来）クリャーで「行けば」の形であったが，最近，京阪形の「イッタラ」が入って若い人は「イタラ」になったとのことである。同じようなことが外近畿にはないか。

㋬命令形

「見ろ」を「ミヨ」，「起きろ」を「オキヨ」というのは西日本の特徴になっていたが，京阪では，連用形命令法を使い，この「ミヨ」の形がない。外近畿に「ヨ」があるようだがどの範囲かを知りたい。

(3)活用種類の混用

近江坂田郡で，「蹴」を「ケます」となることは，下一段活用化である。

東部方言では，最近，サ変終止形を「シル」といい，カ変未然形を「キな

い」と言ったりするということである。

京都・滋賀・福井の各地には，一段活用のラ行五段化傾向，カ変，サ変の上一段化傾向がある。

鳥取では，借レル（下一）と，借リル（上一）とがある。

愛媛県でも，「飽きる・借りる・しみる・足りる・伸びる」が五段化。「できる」が下一段化。「こしらえる，こたえる（強く感じる），立てる」が五段化しつつあるということである。

(4)二段活用

和歌山県下に多いが，「下ルル・過グル・転クル・なズル・行カルル・起キラルル・書カスル・勉強サスル」などについて調べる。

(5)ナ行変格活用

丹波・若狭西部など一般に外近畿にあるようだ。「死ヌル時，死ヌルまで」など。

(6)特殊動詞

京都のオス（有ります）＝否定　オヘン，連用　オシタ，終止　オス。

これは山城・丹波南部・近江・若狭までにある。

大阪のオマスは山城中央部・近江南部にあるが，終止形は使わず，オマヘンの否定だけを使うとか，オスを補助動詞として使うなどの地域を調べる。

形容詞

(イ)未然形（推量）

（赤）アカカロー・（新）アタラシカローを使うか。

「高カロが，低カロが」のようにならべて言う時だけに使う，など。

島根県益田市では（高）タカーローのような形もある。

(ロ)音便形

京都で，「(高）タコーテ」と「タカーテ」とがあるが普通はタコーテ，(美）ウツクシューテ，である。

新しい形としてタカーテ，タカーナイ，美シーテ，美シーナイ，タカイナ

イ（高いことないの省略か）

鳥取市ではタカテ，タカーテである。

形容動詞

指定助動詞「ダ・ジャ・ヤ」とともに，「静カダ」の形と，各活用形の状態。

感動「――ナァ」のついた時などについて調べる。

静カデワナイ→静カジャナイ→静カヤナイの関係は，高知市で，ソンナニキレイヤナイジャナイカなどとともに考えられるだろう。その間の様子を知りたい。

年令層の差もあるだろう。

助動詞

(1)指定助動詞

「ダ」「ジャ」「ヤ」が近畿にあるので，その境界も大切だが，二つを並用する地域。どれとどれとを並用するか，などについて。

また，活用形によっては使うという場合，例えば，ダローは使うが，ダは使わないというような地域。

「ナンジャ，カンジャ文句バッカリ言ウ」のように特殊な場合だけ「ジャ」を使うという地域。

能登にある「デァ」の形など，それに近い形があるか。

そして，年令層による違いも知りたい。

内近畿はヤ，その外側にジャ，さらにその外側の外近畿にダがあるようだ。並用地域はどれとどれとを並用するか。

(2)否定助動詞

京都では，普通の否定には「ン」，強い否定には「ヘン」であったのが，最近は「ヘン」が普通になったようだ。

「ヘン」は終止形に，「ン」は他の活用形に使うとも言える。

神戸でも「行カンなら行カンでもええけど」のように，「ン」は特殊な場合に用い，普通は「ヘン」である。

「ヘン」のほかに，セン（近江・若狭・丹後）シン（近江―蒲生・高島）

がある。

赤穂市で，起キヒン・落チヒンなどと，語幹がイ列音で終るものはヒンとなる傾向がある。

書カン——書カンでも——書カイでも——書カナあかんとなる「イ」がある。「行カイでわかるか」など。

(3)打消意志助動詞

「マイ」は少ないようだが，丹後・若狭・越前の方になるにつれて多くなる。

未然形につくか，終止形につくか，その間に意味の違いがあるか。打消意志と打消推量の違いなど。

(4)丁寧指定法

「です」のドスは京都，ダスは大阪で，その境界は山城と摂津というが，福知山・敦賀にもダスがある。終止形は大体中年以上の人だけが使い。終止形以外は若い人も使う。

ドス←——デオス　ダス←--デヤスというが，和泉南部はジャス・ヤスがある。

(5)敬語法

(イ)「ハル」

京都は「書カハル」，大阪は「書キハル」というが，京都でも連用形から「書キナハル」「書キヤハル」もあるし，これはかなり入りまじっているようである。近江の湖北で親愛的に，書カアル・起キヤアルがあるという。越前の一部では書カル・起キラル・起キヤルがある。

越前で書キンサル，越前南部で書キナシタ（←--書キナサッタ），近江西南・若狭の一部で書カッシャル・書カッサルがある。

「ンサル」は中国地方にも通じる。

福井市でキャハッタ（来られた），加賀大聖寺ではキナッタである。

(ロ)「テヤ」

丹後・丹波・若狭にあり，神戸から西にある。

書イテヤ（「お書きになる」の意だが，尊敬の程度は軽い。テヤのヤは指定助動詞だから，ジャ地域では，テジャとなる）

「ハル」地域の外側にあることは福井がハルで石川県がテヤであるし，大阪がハルで，神戸がテヤであることに通じる。

ナハルはナサルの変であるとみると，このテとは由来の違うものであるから，ハルを使うか，テヤを使うかの違いは重要である。これを大阪・神戸の違いとみてもよい程だ。

石川県ではテヤッタから変った「聞イタッタ」がある。

(ハ)「ヤス」

山城・南丹波・近江に「オ書キヤス」がある。ヤスはハルよりも勢力弱く，中年以上の人が使う。

助詞

(1)省略形

一般に格助詞の省略は多いが，どの語をよく省略するかについて調べる。

省略の比較的多いのは，目的格「ヲ」，引用格「ト」で，それに続いて方向の「ヘ」である。

省略の少ないのは，無生物主格「火ガ燃える」などの「ガ」である。

このようなことについて地域性とともに調べたい。

(2)融合形

石川県で，柿が――カッキャ　酒が――サキャー，鍵が――カンギァ，行くのが――イクガー，犬が――インナ，犬を――インノ

中国地方で，「を」がiで終る名詞につくとき，銭を――ゼニュー，火を――ヒューとなり，ヒで終る名詞につくとき，酒を――サキョーとなる。

(3)格助詞

場所を示す助詞「で」は，但馬，因幡・東伯では「から」となる。山で遊んだ――山カラ遊んだ。

島根県浜田市では「に」がe母音につくとき，酒エ酔う，燕エ餌やる，となり，その他のとき，学校イ行く，弟イやる，のように「イ」となる。

出雲市では，鳥ンなる，学者ンなる，のように「ン」となる。

(4)接続助詞

確定順接に「サカイ・サケ・ハカイ・ハケ」がある。内近畿的だがその範囲と語形とを知りたい。

京都では「シ」があってサカイより順接的接続機能は弱い，おとなしい感じ，サカイ対シはカラ対ノデに近い。

丹後・奥丹後・越前・若狭は，「デ」と「サカイ」とが並存。

山城・口丹波は「サカイ」と「シ」とが並存。近江は「シ」と「デ」とが並存とのことである。

(5)終助詞

(イ)疑問

石川県で，ソーケ（そうか）は目上に，ソーカは目下か対等に使う。

このように「ケ」の方が丁寧，目上に対して使い，「カ」は目下にということは北関東にもある。

丹波・近江では「ケ」は女性の普通語（男性が用いるとやや丁寧），そのほかに「コ」があって，これは男性が同輩以下に用いる。

(ロ)禁止

「ナ」を「起キナ」「投ゲナ」「来ナ」「スナ（するな）」の形で，兵庫県西部に多い。「る」の脱落である。

京都に書キナ（禁止）と書キナ（命令）とがある。

(6)係結

「親ナラコサレ」の形は丹波・近江・若狭・播磨と外近畿にあるようだ。

以上，近畿方言語法についての問題点をあげたが，これらの項目により先の内・中・外近畿における分布と語形の移りかわりの状態について調べたい。